

報告②

筑紫大宰の備え

講演者紹介

小嶋篤（こじまあつし）

九州歴史資料館学芸員（技術主査）。専門は日本考古学。博士（文学）。平成二十一年福岡県教育厅に入庁。九州歴史資料館、九州国立博物館研究員を経て、令和三年四月から現職。

筑紫大宰の備え

九州歴史資料館 小嶋篤

ご紹介に預かりました。九州歴史資料館の小嶋です。よろしくお願ひいたします。私からは筑紫大宰の備えとして、主に築城期の古代山城の様相についてご報告させていただきます。（図11）

一 はじめに

日本書紀には、壬申の乱のときに筑紫大宰の栗隈王に対して、軍事動員、兵隊を出してくれという要請が近江朝からなされたことが記されていますが、その時に栗隈王が返答したところが、よく大宰府の軍事的機能の根源として使われるところでございます。現代語訳で「筑紫の国は以前から辺賊の難に備えている。そもそも城を高くし、溝を深くし、海に臨んで守るのは内の賊のためではない。」という理由で、決して近江朝の、天皇の命令に従わないわ



筑紫大宰の備え

九州歴史資料館 小嶋 篤



けではないのだけども、そもそも外敵に備えているので、ここを空にすることはできない、と軍事要請を断るという一文です。（図12）

この返答から判ることとして、国家が軍隊を組織するときに、まず筑紫大宰に命令を発して、その配下である国造や評造に兵士を出させるように要請することです。筑紫大宰は戦時編成をする際の司令塔の役割を果たしていた、ということがうかがえます。ただし、軍事機能といつても、筑紫大宰や筑紫国造達で勝手に軍隊（征討軍）を組織することはできないわけでありまして、やはり、天皇、大王の勅命を受けないと、正式な軍隊というのは独自に編成することはできないのです。勝手に新羅を攻めたいといつて軍隊を組織できるわけではありません。これを唯一、例外的にやつたのが奈良時代の藤原広嗣です。大宰府で反乱を起こしますけれども、このときは勝手に戦時編成をしたわけですね。原則としては、こういうことはできないわけです。（図13）

あと、「城を高くし、溝を深くし」と書いていますので、古代山城の軍事施設についても管轄していたことが窺えるわけです。

壬申の乱(672年)における近江朝による軍事動員要請



筑紫大宰(つくしのおおみこともち)・栗隈王(くりくまおう)の返答

「筑紫國者、元戎邊賊之難也。其峻城深隍臨海守者、豈爲内賊耶…(後略)」

(『日本書記』卷第二八 天武天皇紀上)

＜書き下し＞

筑紫国は、元より辺賊の難をまもる。其れ城を峻くし隍を深くして、海に臨みて守るは、あに内賊の為ならんや。…(後略)

＜現代語訳＞

筑紫国は以前から辺賊の難に備えている。そもそも城を高くし、溝を深くし、海に臨んで守るのは内の賊のためではない。…(後略)

図 12

筑紫大宰の軍事的権限

①筑紫大宰が筑紫国の軍事動員機構を管轄していたこと

・天皇勅命を受けて、軍隊を戦時編制する司令塔。

※外敵襲来時における対処的戦闘については権限・責務をもつが、
正式な軍隊(征討軍)を独自に編成することはできない。

②古代山城等の軍事施設を管轄していたこと

・「令大宰府繕治大野。基肄。鞠智三城。」(『続日本紀』文武天皇二年(698年)五月)

本報告の目的…「筑紫大宰の備え」を体系的・具体的に把握する。

I : 施設 II : 軍隊 III : 兵器 IV : 戦術 V : 戦略

図 13

後の資料、続日本紀で、大野城、基肄城、鞠智城という三城を大宰府が繕治したことから逆算すると、やはり大宰府の前身である筑紫大宰が、これらの山城、軍事施設も平時の管理をしていた可能性というのが有力視できます。

それを踏まえまして、本報告では、「備え」というのは具体的に一体どんなものだったのかというところを、五つの視点から把握することが目的になります。一つは施設。これは古代山城ですね。二つめが軍隊。当然、古代山城だけでは防衛はできませんので、その山城を機能させるための軍隊がどんなものなのか。そして、三つめは軍隊が使っていた兵器がどんなものなのか。四つめが戦術、五つめが戦略です。ここら辺になると、ちょっとと考古学が苦手というか得意とする分野ではないんですけども、順番に進めていきたいと思います。

二 施設

施設は考古学の得意とするところであります。まずは、古代山城の築城ですね。古代山城の年代論に関しまして鞠智城の調査研究成果というのは非常に重要な基点になつております。これはやはり面的な調査がある程度なされて、なおかつ遺物の出土量が多い。出土量が多いということは分析対象資料数が多いので、安定した分析結果を導くことができます。そのことを端的に示すのが、木村龍生さんが進められてきた鞠智城の出土土器の時期別の変遷です。ただし鞠智城の場合、いわゆる再整備型の古代山城ということで、もともと集落あるいは谷部には横穴墓とか水田が営まれていたような生活圏の中心だったところを山城に改変していますので、山城築城以前の遺物も見つかるわけですね。このため、集落に帰属する遺物と鞠智城に帰属する遺物というのが、ある時期、

交わっているわけです。それがまさに築城の時期に当たるわけですが、この資料の帰属に課題があるということが言われてきたわけです。（図14）

（一）大野城跡出土土器の総量分析

鞠智城の調査研究に倣つて、大野城、大宰府の史跡でも土器の総量分析というのを最近進めています。まだ進めている途中の経過報告でございますけども、まず資料的な特質としては、大野城の山頂部、土壘がめぐつてあるエリアというのは古墳時代の集落や墓域と重複しない場所になります。これは発掘調査でも裏付けられていまして、調査しても、古墳時代以前の土器が一片も見つかりません。つまり、基本的に古墳時代以前は、燃料を取つたり、材木を切つたり、あるいは狩猟をしたりという生活の一部に使っていたかも知れないので、居住するような場所ではなかつたということが実証されています。（図15）

ただし、大野城固有の問題として七七四年以降は大宰府の四王

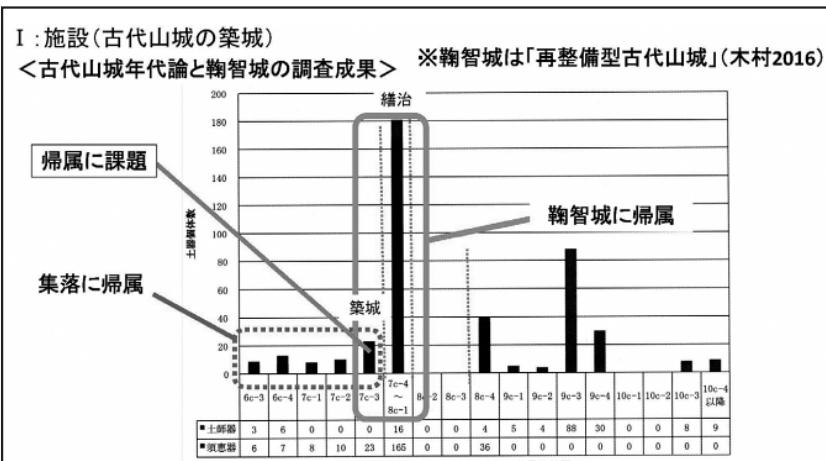


図3 鞠智城跡出土土器の時期別数量比較図
資料の限界を克服できる数少ない古代山城が鞠智城跡や鬼ノ城跡であり、とくに「鞠智城跡出土土器の総量分析」は、考古学的手法により導き出された堅実な研究成果である（木村編2015年）。

＜大野城跡出土土器の総量分析＞

- ①大野城の山頂域は集落・墓域と重複しない「新規築城型」
 ②774年以降は、大宰府四天王寺(四王院)と重複



4,101点の土器に小田編年IVB期以前の土器が1点も確認できない。

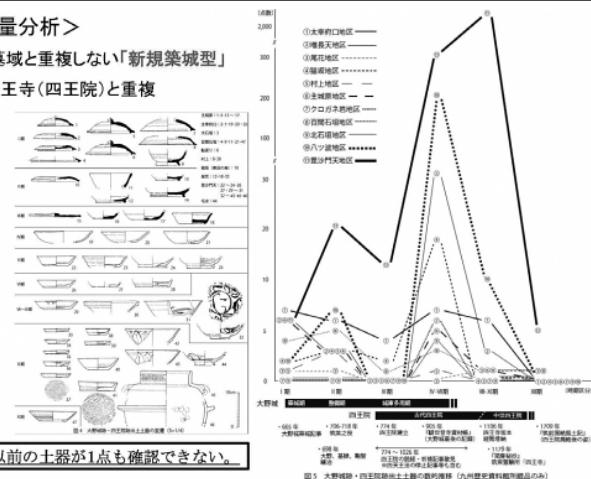


図 15

＜大野城築城にかかる資料＞

・主城原地区出土須恵器

白村江の戦い(663年)前後に用いられた須恵器壺蓋(小田編年V期)。



九州歴史資料館 特別展「筑紫君一族史」にて公開中(12月8日まで)

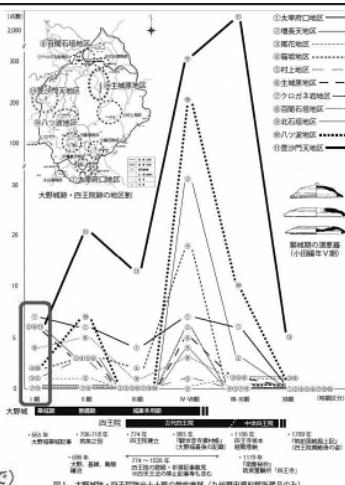


図 16

院、四天王寺と重複しますので、七七四年以降は寺院と山城という二つのものが交わっているので、この時期以降の帰属遺物に関しては課題があるということになります。ただ、やはり重要なのは、現在カウントしている四一〇一点の中に、七世紀前半以前の土器が一点も確認できない、これは、極めて重要な成果であり、注目点になります。（図16）

大野城に直接関わる資料としましては、主城原地区、名前のとおり城のメインではないかといわれる地区から出ている土器が重要でして、大体直径が十センチメートル前後ぐらいの非常に小型な須恵器、壺の蓋になります。須恵器壺の直径が最も小さくなるのが白村江の戦いぐらいの時期になりますので、さすがにこの土器で白村江の戦いの前か後かというのは定められないのですけども、おおよその上限年代がうかがえます。これは一つの地区だけで見つかっているのではなく、新規築城型の古代山城である大野城の各地区で、複数こういった破片が見つかっていますので、資料の分析結果としてはかなり安定している成果だと思います。

（二）国家が重要視した古代山城の築城年代

古代山城の築城で触れなければならないのが、亀田修一先生がご研究を進められている古代山城には未完成であるものが入っているんじやないかという未完成論。あと、神籠石系山城と言われたりもしますけども、史料未記載の山城、名前がわからない古代山城との関係です。

まずは亀田先生と稻田孝司先生の研究成果を引用させていただきますと、国家、大宰府が重要視した城として

高安城、大野城、基肄城そして鞠智城、というものが最上位にあって、鬼ノ城、金田城、屋島城と続いていきます。これら国家が重視する城が最初に築かれていくわけですけども、土壘・城郭の分類に合わせても、やはり重視された山城が上位に来て、第二系統と稻田先生の方は載せてていますけど、第一段階に築かれていて、資料未記載の城は、やっぱり後続していくという形で、これは一昔前だと資料未記載の古代山城の方が先行するんじゃないかという説もあったわけですけども、現在の研究状況からすると後続するという理解が大勢になっています。(図17)

(三) 大野城と鞠智城

大野城と鞠智城の土器研究の成果についてです。今まで鞠智城の研究成果は、一つ飛び抜けて進んでいましたので、鞠智城の調査研究成果を相対的に評価するというのはなかなか難しかったわけです。大野城の成果を踏まえますと、鞠智城と大野城の土器の総量の増加や減少の流れというのが非常に似通っていることがわ

〈古代山城未完成論と史料未記載古代山城〉

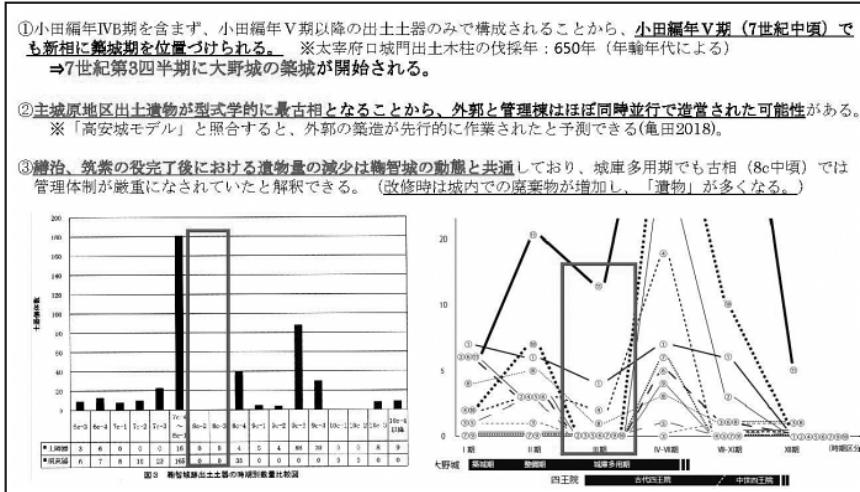
①外郭施設の完成度、②城内施設の存在と維持管理状況から、国家・大宰府が重視した城は「高安城、大野城、基肄城、鞠智城」が最上位にあり、「鬼ノ城、金田城、屋島城」がそれらに準じる(亀田2018)。そして、史料に見られない古代山城の多くは未完成の状態で棄城したと考える。

未完成といは現象は、史料未記載古代山城の築城時期が相対的に後に出る蓋然性が高いことを示す。稻田孝司氏による城壁構造の系統区分と段階設定は、亀田氏の分析結果とも大部分が重なっており、國家・大宰府重視の古代山城(第1段階)から築城がはじまり、第2・3段階に史料未記載古代山城の多くが築城されたと理解できる(稻田2012)。



17

図 18



(図18)

大野城では七世紀の第4四半期から八世紀第1四半期は、土器が圧倒的に多いですね。大野城の整備期としていますけども、いわゆる築治がなされた時期というのは、実際に整備を担っている労働者の人たちもたくさん入ってきますので廃棄物が大量に城内に残されていることがわかります。ですが、一旦整備が完了すると、土器の量からいくと、むやみに人が入っていない。これはやはり、米を貯蔵するようになつたという鞠智城の成果もありましたけども、國の財産を保管する場所なのでむやみに人が入るような場所ではないということですね。土器量の少なさというのは、律令制下での古代山城の大野城や鞠智城がいかに厳密に管理されていたのかということを反映しているのではないか、というふうに考えております。

かつてきました。特に八世紀半ばの第2四半期、第3四半期というのは鞠智城の土器のがものすごく激減するということが言われていたわけですが、この時期にあたる大野城でも、全くなくなるわけではないですが、複数地点で明らかに減少が確認されています。

三
軍隊

七世紀の第3四半期、百濟救援戦頃にやはり古代山城はつくられて いるのではないか、ということがうかがえたわけです。この時 伝統的に朝鮮半島での戦争に動員されていた軍隊です。古墳時代以来、 ていますのが筑紫君磐井の乱後、葛子が糟屋屯倉を献上して、筑紫 国造に筑紫君が就いたのが大体六世紀の中頃ぐらいと言われていま す。日本書紀で、朝鮮半島の戦争に国造軍が動員されている記事が 出てくるのが六世紀の後半になります。（図19）

（二）軍事動員機構の変遷

図21「国造軍の変遷と筑紫嶋の動態」に、古墳時代から奈良時代 の律令軍団制に至るまでの軍事・国造・屯倉の動向といったものを まとめています。筑紫君磐井の乱に画期があって、乱後に国造を中心とした軍隊というものが朝鮮半島での新羅との戦いに動員されて いるということがうかがえます。

(一) 軍事動員機構の変遷

國21 「国造軍の変遷と筑紫嶋の動態」に、古墳時代から奈良時代の律令軍團制に至るまでの軍事・国造・屯倉の動向といったものをまとめています。筑紫君磐井の乱に画期があって、乱後に国造を中心とした軍隊というものが朝鮮半島での新羅との戦いに動員されて

II: 軍隊(國造軍・評造軍)

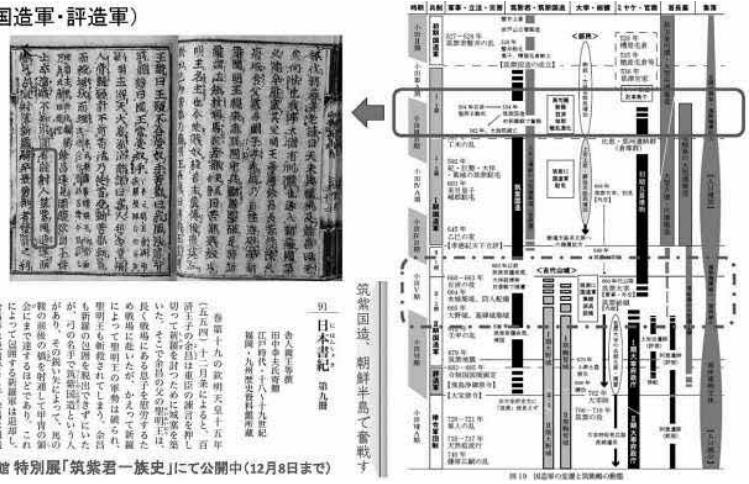


図 19

最近の考古学の発掘調査では、六世紀の後半には那津官家と目される、比恵・那珂遺跡群の倉庫群というのが機能しているのが裏付けられています。この時期にミヤケや国造制による外征軍というものが、組織的に運用されていたことが、文献史料だけでなく考古資料からも裏付けられるようになつてきましたということです。この軍隊が基本的には、白村江の戦い、あるいは築城期の古代山城の防衛まで担つてている軍隊になつてきます。

若干、宣传を挟みます。この国造の軍隊、あるいは国造の歴史といいうものを九州歴史資料館の特別展「筑紫君一族史」で十二月八日まで、展示しております。磐井が敗れた後に筑紫国の人々がどういった歩みを進めていたのかというのを考古資料と文献史料の両方から押さえていくという、そういう特別展を現在やつてていますのでぜひひお越しください。（図20）

（二）古代山城と国造軍

ただ、古墳時代の軍隊がそのまま古代山城の防衛、あるいは百済



図20

救援戦争を担つたかというと、ここに一つクッショーンがあります。孝徳朝の天下立評があります。これを考古資料、現在の遺跡の状況から見ていくと、立評という、屯倉を整理して新たな地方組織をつくるわけですけども、これに関する評衡の遺跡というのは、上岩田遺跡や阿恵官衛遺跡で発掘調査が進んでおりまして、それを見ると役所として整備されていくのは七世紀の後半です。むしろ百濟救援戦争が終わつた後に官衛としての建物群ができていきます。つまり、天下立評と遺跡の動向に時期差があるということがわかつてきます。（図21）

ただ、考古資料で全く痕跡がないかというと、これは小田先生や下原幸裕さんの終末期古墳の研究から導き出される現象があります。豪族が勝手に人々を動員してつくつてきた、人々と協力してつくつてきた大型の古墳というものは、天下立評の時期にほぼ一齊につくらなくなる。人を動員する動員体系としてはここに一つ変化があるんじゃないかな、ということが考古資料からは窺がえるわけですね。大型古墳の築造停止というのは、各地の国造や県主等の豪

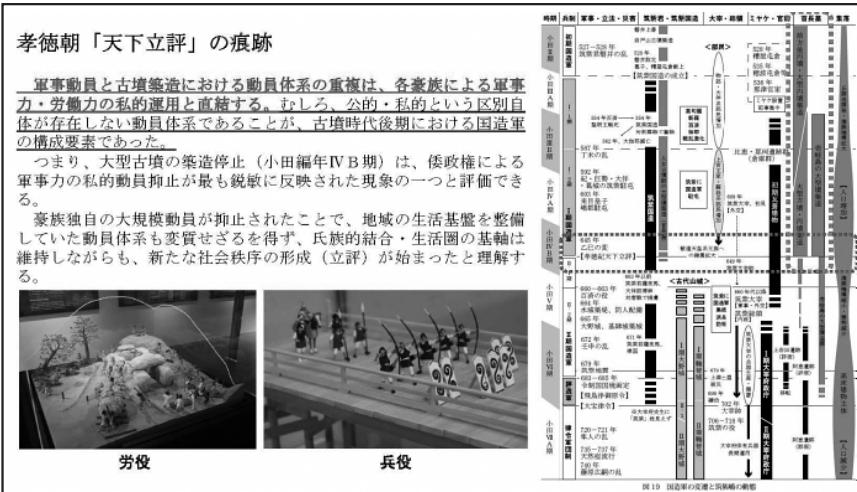


図21

族たちが、国家の目線で言うと私的に動員していたものが、天下立評で抑止されたのだろうなど理解できます。これは自分たちが勝手に自粛して止めますというものではなくて、国家の制限がかかつて、古墳墓制というものが一気に衰退するという現象が起こっているのではないか、と私は理解しています。

このため、国造軍を中心とする動員体系ではあるのですけども、古墳時代の後期のそのままのスタイルでやつてきたわけではなくて、天下立評というものを挟んだ上で動員体系になつていて、と考えております。

四 兵器

この国造軍がどんな武器を使って、百濟救済戦争あるいは古代山城を使つた防衛を担つていたのかというと、これは考古学の得意なところですが、モノから把握することができます。（図22）

III: 兵器(古代武器様式第1段階)

古墳時代の盛んな造墓活動（新式群集墳）は各種武装を中心とする膨大な副葬行為を伴つていた。7世紀中頃の造墓活動縮小により、動員・墓域制限だけでなく、副葬行為も縮小した。制限法としての薄葬令は、列島規模で軍事費の蓄積を図る契機になったと理解できる。

飛鳥時代に製作され、律令期に引き継がれた大宰府備蓄兵器も7世紀後半の製品を上限としており、薄葬令は兵器の長期保管・運用の転換点としても評価できる。



火災により焼失した大宰府備蓄兵器（古代武器様式1段階主体）
(大宰府政庁跡・大宰府政庁周辺官衙跡出土品)

九州歴史資料館 特別展「筑紫君一朝史」にて公開中（12月8日まで）

時期	中古	弓矢	墓地地区出土被葬遺物	晩期
7c 後半	小札幅縮小	鍛造主体	【小札】 【四箇金具】 【鍛造金具】 98点	古代武器様式 1段階
8c 前半	鍛造甲出現	四箇金具消滅 開閉主体	1,912点	
8c 後半	小札二枚重ね出現 甲板出現	鍛造消滅	138点	
9c 前半	第3威孔消滅			
9c 後半	星兜の上履	雷地模様化 鍛造変化 柳葉1式出現	星兜合まない 柳葉1式合まない	古代武器様式 2段階
10c 前半	承平・天慶の乱（941年、大宰府暴動）			
10c 後半	星兜定式化指向 二行十三札小札	鑄相1式出現 大鎧出現	二行十三札 ・大鎧合まない	初期中世 武器様式 1段階
11c	星兜定式化			
12c		中世組成（柳葉1式 ・柳葉1式・柳葉2式） の出現	中世組成合まない	初期中世 武器様式 2段階

※複数回に亘る12世紀（7世紀後半の薄葬令と同時）。小磯寛2016「大宰府の墓葬に潜む考古学的研究」より引用

図22

(一) 筑紫大宰の兵器生産と備蓄兵器

古墳時代には沢山お墓をつくって、いろんな武器類を次々と副葬行為で消費していったわけです。この七世紀中頃に終末期古墳化、古墳墓制自体が大幅に衰退しますので、今までお墓に消費していた武器類が蓄積する、長期間保管する消費形態に変わつていったということがうかがえます。それを裏付けるものが、大宰政庁周辺官衙跡の藏司地区の発掘調査成果です。

(二) 兵庫の中身

藏司地区の発掘調査では十世紀に藤原純友が焼いたと思われる兵庫の屋根瓦や保管物が大量に出土しました。これを見ると、出土している遺物は七世紀後半から八世紀前半ぐらいにかけて生産された武器類というものが圧倒的に多く、八世紀後半、九世紀に補充されている武器はかなり少ない、一割未満だという分析結果が出ています。弓本体は燃えているので残らないのですが、弓に取り付けていた金具は出土しています。弓金具は古墳時代後期あるいは飛鳥時代の前半の横穴墓や群集墳に副葬されている両頭金具という飾り金具なのですが、これが十世紀まで保管されていました。つまり古代山城が築かれた時期というのは、弓矢の備蓄というものが本格的に始まる、そういう時代であつたことがうかがわれます。



図23

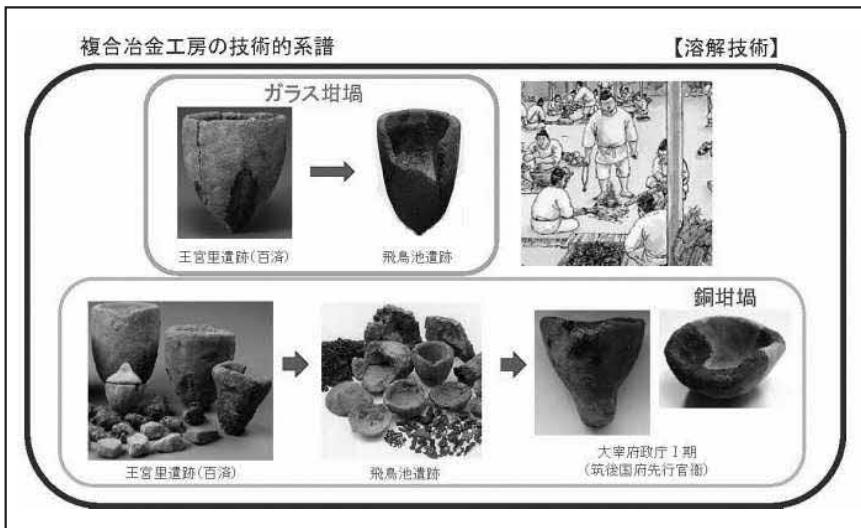


图 24

(三) 素材と生産

次に、これらの武器をどういうふうに備蓄していたのか、ということで一つ注目できるのが、大宰府政庁Ⅰ期の遺跡です。筑紫大宰が勤務していたであろう役所の近くに、工房群の残滓が見つかっています。工房自体が見つかっているのではなくて、工房の廃棄物が大量に出ているわけですけれど。こういったものを見ると、日本書紀の六八五年に筑紫大宰が鉄一万斤、箭竹二千本を朝廷に申請した記事に思い当たります。矢の素材の鉄と箭竹を送ってくれということは、当然、筑紫で矢に加工するからということです。筑紫大宰の管轄下にある工房、もともとは大宰府の整備を主目的とした工房ですけれど、ときには筑紫大宰が要請することによつて兵器をつくつていたと理解できます。(図23)

(四) 工房の系譜と体制

筑紫大宰の工房がどういった技術的系譜にあるかといふと、もともとの淵源を辿ると百濟ですね。百濟の王宮里遺跡で出土しているドングリ形の埴堀は特徴的ですが、これが飛鳥池遺跡で見つかっています。大宰府ではなく成れの果ての姿となつた埴堀が出土しています。百濟からダイレクトに大宰府ではなくて、飛鳥を挟んで技術体系が持ち込まれている。これは大宰府だけではなくて、当時の筑紫国、後の筑後国である久留米の国府でも同じようなものが見つかっています。筑紫大宰が管轄している工房に、百濟から飛鳥を経由した技術というものが持ち込まれている、ということが残滓からうかがえます。(図24)

廃棄物の組成に特徴的なのは、鍛冶だけとか鋳造だけとかいう單体の業種ではなくて、漆もあつたり、木工もあつたりという、異業種の工房の残滓が一か所で見つかるということです。そこには漆を備蓄した容器とかもありますので、複合した工房、そして工房に様々な材料を供給する体制が、すでに筑紫大宰のもとで整備されていた、ということが考古資料からうかがえるわけです。単に技術的な連続性に限らず、どういうふうに工房を運営するかという方式自体にまで飛鳥池遺跡でやっていた運営組織を持ち込んでいることが、これらの資料からうかがえるのです。（図25）

五 戰術

はい。ここから空中戦に入つていくわけですね（笑）。

まず、我々は、この古代山城築城の時期にどういう防衛をしていったのかというのを現代の合理的認識で把握しがちです。それを何とか抑制しなければいけない、禁欲的にやつていかなければいけないわけです。そのためには、まず日本書紀、で生きるだけ同時代に記されていた史料から、昔の人が戦争するときにどういう考え方をしていたのか、という合理的



図 25

図 26

IV: 戰術

『日本書紀』記載の「戦争」記事

恣意的編纂もなされているが、古代山城と同時代の歴史書である点は重要。

筆城期古代山城に近い同時代人の「戦術に対する合理的思考」を探る上での基本文献となる。



的思考を把握しなければならないわけです。日本書紀にはたくさん戦いの記事が書かれていますけども、これを素材として、同時代人、厳密には古代山城の築城期より少し新しいのですが、その時代の戦術に対する合理的思考というものをみていきます。（図26）

(一) 包囲と焼討ち

日本書紀に記載された集団戦闘の形態をみると、一つは防御施設を包囲して焼討ちをしています。これは日本書紀というものは基本的に皇位継承戦争を中心に取り上げていますので、どうしてもこういう戦い方が中心にはなるんです。ここでいう防御施設というのは皇子や臣の館、あるいは古代寺院、そこに立て籠つて戦うという形になります。大化の革新のときも中大兄皇子は蘇我入鹿を討伐した後、法興寺に籠っています。いざ戦闘となると防御施設に入る。すると、そこを包囲して、最終的に焼討ちするという

流れですね。
(図27)

図 27

図 27 は、『日本書紀』記載の集団戦闘形態を示す図解です。

手段: 集団戦闘の集成と分類

- ① 防御施設の包囲(→焼き討ち)
※ 防御施設: 皇子や大臣の館、寺院。
- ② 交通路の封鎖
「壬申の乱」での記載が顕著。
- ③ 会戦・陣地戦
峠、渡河地点での迎撃。
陣地の構築。
- ④ 突撃・追撃
歩兵or騎兵。
- ⑤ 奇襲(夜襲)・伏兵

図には、戦闘の様子や、武将の装束、陣地の構築などが示されています。

(二) 封鎖と陣地

会戦では、多いのは交通路の封鎖、これがメインの戦い方です。飛鳥時代の人たちは、敵が攻めてくるぞという時には交通路の封鎖というのを最重視しているわけです。瀬田橋の戦いの模型でみてみると、ここに隼人の盾を置いています。日本の戦闘形態としては、持ち盾は基本的に使わずに、置き盾で陣地を構築する。峠や川を挟んで陣地を構築したら矢合させをして、その後、近接戦闘に入つていく。これが中世の武士団の戦い方まで、脈々と継承されていくわけです。

実際の会戦は、峠や渡河地点で迎撃する。あるいは陣地を構築する。そして、戦局を左右するところには勇者がいて、突撃、追撃というものに入つていきます。奇襲や伏兵という記事もあるんですけども、基本的には記述としては少ない訳ですね。やはり重視しなければいけないのは、当時の人たちの合理的な戦い方としては、交通路を封鎖して、陣地を構築するというのが重要な要素になつているということ。それがセオリーだろう、というのが昔の人たちの考

え方であつたと把握できます。

(三) 古代山城を用いた戦術

以上を踏まえると古墳時代の戦い方では、館や、後の飛鳥時代になると寺院に立て籠つてはいるので、城に立て籠るという戦い方はしていられないわけです。つまり、大規模で恒常的な防御施設・古代山城の存在というのは古墳時代の戦術や戦略と断絶する、ということは間違いないです。

兵器、これはもう完全に古墳時代の武装と連続しています。ほぼ古墳時代の武器様式を継承したものが飛鳥時代の武器群になります。また、設置式の弩や携帯式の弩、これは朝鮮半島の古代山城を調査するとかなりの頻度で出てきますが、弩と弓矢の鎌は形が違うのではつきり判りますが、こういったものが今のところ日本では全く見つかりません。大宰府の兵庫でも一点も見つかりません。新たに弩を導入するという記事が書かれているのですが、かなり限定的な導入であつたことがうかがえます。

軍隊、これは軍團制成立以前の動員方式、基本形式というものは古墳時代の国造制と連続して成立しているものだらうと思います。

戦術、これは特に壬申の乱での記載が中心になりますけども、古墳時代の集団戦闘の仕方と連続しています。壬申の乱では、主戦場ではありませんが高安城も戦場になつています。この高安城の戦い方をみてみると、まず防衛している近江軍の兵士が敵軍を視認した後、一戦も交えずに古代山城を放棄して逃げています。その代わり

「近江軍があそこにいるぞ！」 ということで高安城、山城を下りて会戦するという動きです。結果的にはやり返されて負けてしますが、このように、壬申の乱の時も山城に立てこもつて戦うというよりは、山城に登つて敵軍の動向を見定め兵を差し向けるスタイルで戦つてることが、高安城の使い方からうかがえるわけです。

以上を踏まえると、国造軍が採用した戦術としては、交通路を封鎖し、そのあと陣地戦、会戦を行うというのが、セオリーナやり方であるということです。最初から古代山城に籠城するという戦術は構想していなかつたと考えられます。(図28)

六 戰略

古墳時代からの屯倉の整備を見ていくと、国造軍、外征軍の動員方式というのは、九州北部の拠点施設に軍隊を集結させて、段階的に第一次派兵、第二次派兵という形で派兵していくというや

V: 戦略

- I : 施設・・・大規模な恒常的防御施設の存在は、古墳時代の戦術・戦略と断絶する。
 II : 兵器・・・新式兵器（設置式・携帯式弩等）の導入は限定的で、古墳時代の武装と連続する。
 空手房運営方式（律令の複合治金工房）は、古墳時代と断絶する。
 III : 軍隊・・・軍團制成立以前の動員方式・指揮系統は、古墳時代の国造軍と連続する。
 IV : 戦術・・・築城期古代山城と同時代（壬申の乱）の記録から、古墳時代の集団戦闘と連続する。

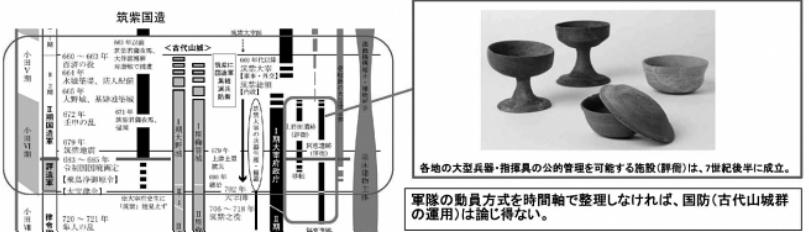
国造軍が多用した戦術:「交通路の封鎖→陣地戦・会戦」

国造軍の外征軍動員方式:九州北部の拠点施設(那津官家等)に国造軍を集結させ、段階的に派兵を実施

※戦時侵攻体制(指揮系統・動員方式)を対処的に改変することで、戦時防衛体制(防人・烽火・古代山城群の運用)に移行する。

※筑紫大宰体制下においても、国造制廢止（683～685年）前は、筑紫国造（筑紫国唯一の国造）が指揮具・大型兵器を私家に保管しており

軍事動員の中核を担っていた。つまり、第紫国造軍の動員なくして、防衛線が広域におよぶ古代山城群は機能し得ない。



28

り方をしています。このため、白村江の戦いの後、直ちに防衛体制を整えるという時には、戦時に整えていた侵攻体制を、改変することで防衛体制に移行している、ということがうかがえるわけです。

筑紫国造軍の動員がないと、防衛体制も成立しません。中世の山城に比べたら古代山城は圧倒的に面積が広く、動員数が多くなければ古代山城は機能し得ないため、大規模動員を可能とする方式、国造軍が重要ということです。

(一) 行軍路

戦時に、どういうふうに朝鮮半島に派兵していたかなど、やはり壱岐、対馬を通つて行つてゐる。(図29) その時に一番、九州内陸部の要所を通るところ、大宰府がある一日市地峠帶あるいは那津官家が置かれた那津というのが重要な拠点になつていて、この動員路を細かく考古資料からみていきます。(図30)

物資集積や労役、徵發というものを物理的に実現するものが交

筑紫嶺の外征軍動員路(筑紫国造軍の主要動員路はルート③)

古墳時代後期～飛鳥時代は、百济救援戦争を筆頭に、倭政権の主導により多くの人的資源・物資が朝鮮半島に投下された時代である。その中核を担つたのが、筑紫嶺の諸豪族であり、「鞍馬尽しの坂」を含む北上路が動脈の役割を担つた。海西航路と筑紫縦貫道が交わる那津に配されたのが、「那津官家」である。

筑紫嶺北上路は、東は瀬戸内海航路を通じて大王の宮、西は壱岐海峡・対馬海峡を通じて韓半島へと到達する。倭政権の政略的視点、動員路という視点に立てば、東の宮へは「上番・貢納」、西の韓半島へは「兵役」を第一義とした交通路となる。

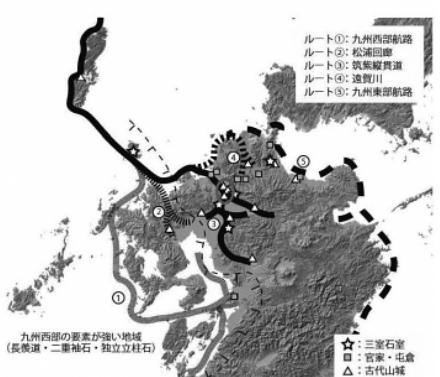
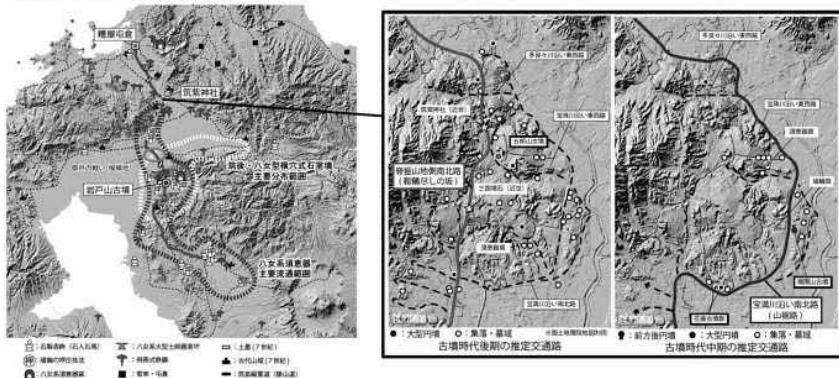


図29

図 30

筑紫国造軍の動員路



物資集積、労役・兵役の徵發を物理的に実現するものが交通路である。筑紫国と火国（肥後）を南北に貫く「筑紫縦貫道」は、筑紫君・筑紫国造の本拠地である八女領域の開発・物流から、古墳時代中期後半以後、岩戸山古墳築造がなされた古墳時代後期前半が成立画期となる。

通路ですけども、その中でも特に重要なのが、那津から八女を通り一番南側で菊鹿盆地に至る、この南北路というのが非常に重要な役割を果たしていると考えています。その整備時期を把握する上で重要なのが、後に基肄城の麓にあたるエリアにおける遺跡の動態で五世紀と六世紀でガラリと変わることです。六世紀に、国造制あるいは部民制、屯倉といったものの整備というものが非常に進んだ、ということがうかがえる事象だと考えています。

(二) 地勢と戦闘単位

筑紫を縦貫する南北路に沿つて北から南をみていきますけども、北は水城と大野城です。南は基肄城ですけれども、もう一つ重要な要素として筑紫神社がある三国丘陵周辺のエリアが要地になつてていると考えています。（図31）これまで、大宰府の内と外といふことで大宰府外郭線という視点を重視してきたわけですけども、戦闘単位、国造軍を動かしたときの戦闘単位という視点で古代山城をみていくと、また違った視点、これから研究を進める上で



南側から見下ろした大宰府・福岡平野遠望



北側から見下ろした大宰府・筑紫平野遠望

筑紫平野と福岡平野をつなぐ地峡帯は、古くからの南北路の収束地であり、現代も高速道路・鉄道等の幹線路が通過している。それら幹線路の行く手を遮るように横たわるのが「水城」であり、『日本書紀』には「大野城」等の古代山城に先んじて、築造記事が記されている。筑紫大宰の管轄を経て、大宰府に繼承された水城は、大宰府の内と外を隔てる外郭として機能した。

南に目を転じると、大宰府条坊を真南に下った先に古代山城「基肄城」がそびえ、その眼下に「三国丘陵」を中心とする低丘陵群が広がる。水域のように整然とはしていないが、三国丘陵は南北路をさえぎる天然の壁のように張り出している。基肄城の存在から、百濟救援戦争後の防衛体制において、脊振山系東端の丘陵群が重要視されたのは明らかであり、近年では開墾土壠・とうれぎ土壠に次ぐ新たな土壠が前畠遺跡で確認された。このような要地に鎮座するのが「筑紫神社」である。つまり、古墳時代に筑紫君・火君(肥君)等諸豪族が往来した「鞍轍尽しの坂」も、国防体制を構成する幹線路の一つとして機能したと把握できる。

図 31

「大宰府の内と外（大宰府外郭線）」という視点ではなく、「国造軍動員下の戦闘単位」という視点で、築城期古代山城群の運用、すなわち「筑紫大宰の備え」を探る。

①水城前面 外敵襲来時の主戦場。東西二つの主要南北路がある平地部で、外敵側も陣地展開が可能である。中央の御笠川により東西に細分でき、東は大野城、西は牛頸丘陵群（小水城群）により鶴翼状に陣地戦が展開できる。なお、藤原純友による大宰府襲撃時も同地が戦場となっている。

②大野城山麓 大野城（四王寺山）の裾には、古墳時代より利用してきた「山裾路」が四方を巡る。行軍は可能だが、大野城眼下で部隊が間延びしてしまうため、外敵側は大規模行軍に向かない。大野城外郭に設置された多くの城門は、これら山裾路や主要登城路側面での対処的部隊展開を図る施設と捉えられる。

③官衙後背 大野城山麓でも官衙との接続路が複数あり、官衙への部隊展開が可能。

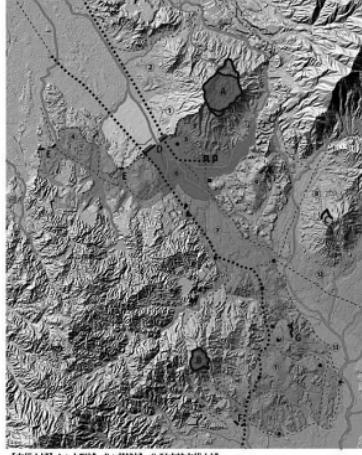


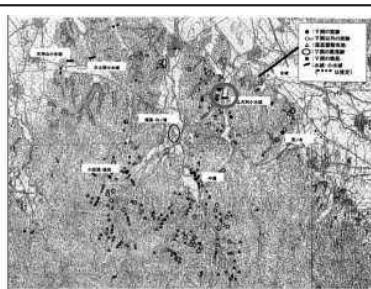
図 32

新しい素材になるのでは、と考えているところです。（図32）

水城前面 外敵の襲来時には、水城の前面が主戦場になるわけですが、この場所というのは大野城と小水城群に挟まれた、三方を囲まれたところに位置しているということが重要です。先ほど山城に籠るというよりは山城の外に出て軍隊を派兵して防衛していく、戦っていくという戦術を説明しました。その視点でみると、大野城には多くの城門が見つかっていますが、これらの城門は山裾の道や、あるいは主要な登城道の側面から部隊展開を可能にする、そういういった施設ではないかなというふうに考えています。

小水城群

また最近関心を持つてているのが、この小水城群がある牛頸の丘陵です。（図33）これは、石木秀啓さんや上田龍児さんが須恵器窯群を大宰府の外郭の中に取り込んでいるのだ、と仰っています。でも、じやあ何で外郭に取りこまるのかというと、これはやはり遺跡の形成過程や植生を考えないといけません。小水城群が作



④小水城群 古墳時代より須恵器生産の燃料林に用いられた丘陵群であり、低草木化が進行していた。物資搬出道路が整備され、かつ見通しのよい高所に面的な陣地構築が可能なため、水城運用のためにも城塞群に取りこまざるを得ない場所であった。

図33

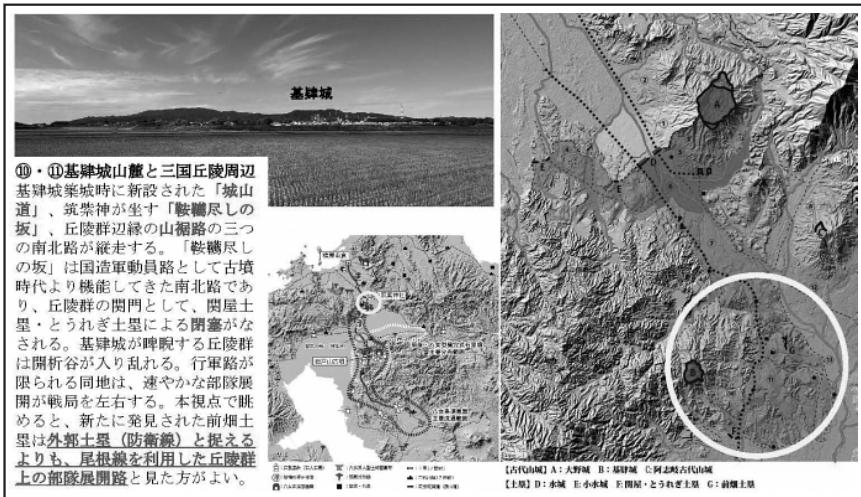
図 34



られた低丘陵は古墳時代からずっと須恵器生産を担っていた所で、いうなれば禿山になつて いる丘陵です。しかも集落も展開して、須恵器を搬出するための物質搬出路も整備されているエリアです。だから水城や大野城を使つた防衛を考えるとき、ここに敵陣を張らされたら水城は全く機能しない、そういうエリアとなつて いるわけです。このことから、牛頸の丘陵は大宰府の外郭線である水城や大野城と一連の防衛ラインに組み込まれているのだ、と最近は考えています。

基肄城山麓 さて、大野城の城内から外郭線をみると、この伸びているのが水城ですね。牛頸の丘陵側は宅地化していますけれども、このエリアは大宰府を攻める敵軍が陣地を張るには一番いいところです。（図34）このように御笠川を間に挟んで向かい合う場所なので、この小水城群がある牛頸の丘陵は大野城攻略には最適なエリアと考えることができます。そういう視点で、三国丘陵をみて きます。ここには古墳時代後期から主要幹線道路があるわけでして、それを見下ろす場所に基肄城があるということになります。山城の真下を通る城山道、あるいは城内路もあるのですけども、そういう

図 35



た道と筑紫神社がある鞍轍尽しの坂、宝満川の山裾道という三つの幹線道路がある要衝に、防衛網があるわけです。（図35）

三国丘陵周辺（図36）このような交通路というのが国造軍の戦いで重視され、戦術の運用基盤になつていて。そのような視点で近年注目されている前畠土塁を考えてみます。（図37）前畠土塁は筑紫神社が在る、入り組んだ低丘陵群上にあるわけですが、私は、これを防衛、城壁的なものと捉えるよりは、交通路、部隊展開路として考えた方がいいのではないか、と考えています。というのも、この大野城の城内にある連絡通路をみると、未調査ですけども、調査をしたらほぼそのまま前畠土塁と似た姿になるのでは、と思っています。そして、こういう部隊展開路をこれからはちょっとと考えていいかなきやいけないんじやないかなと思つています。いわゆる外郭線、その城壁の想定地點以外にも、「ここで戦闘するぞ」というエリアには部隊展開路があらかじめつくられている可能性があるのではどう考えていて。城内、城外という基準だけではなくて、部隊をどう

筑前・筑後・肥前の境界となる三国丘陵を対象に、弥生～飛鳥時代の遺跡動態を検討すると、古墳時代中期以前の集住地は丘陵裾にあり、古墳時代後期以後に丘陵地開発が本格化する。脊振山地側南北路が「鞍轡尽しの坂」であり、筑紫神社を通過する長崎街道(三国坂)との道程重複が有力視できる。←基跡城。土墨群の戰術的運用基盤

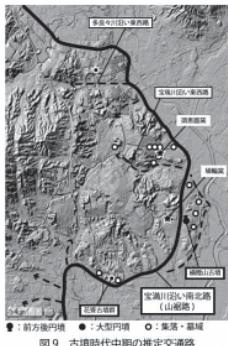


図9 古墳時代中期の推定交通路

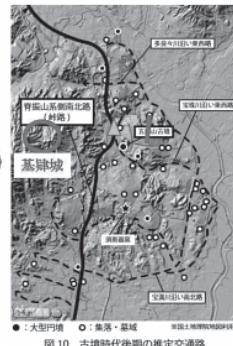


図10 古墳時代後期の推定交通路



図11 1960年代の空撮(国土地理院撮影)で現在三国坂



図12 『田嶋外伝浜千鳥』描写の三国坂

図36

・当該期における大規模労役を可能とする動員体系は「国造-評造-五〇戸造」編成であり、同動員により筑紫に集結していたのが国造軍である。

・官自体が筑紫に西下した状態にあることから、一定数の守衛部隊が駐屯状態にあったと見る。また、白村江の敗戦を経て、帰國した国造軍を直ちに解散させたとは考え難く、帰郷に向けた部隊の再編成も兼ねつつ、唐・新羅の動勢を把握するまでは、対馬・壱岐・筑紫での駐屯を継続したと考えられる。

・百濟救援戦～白村江敗戦直後の駐屯において、国造軍の筑紫集結期間は複数年に及ぶ。つまり、本兵役期間に古代山城の築城(労役)にも国造軍が動員されたことで、平時は異なる「戦時」での短期間かつ大規模労役が可能になったと考える。

・古代山城の築城技術には、新來の百濟系土木技術(版築等)が用いられているが、近年の調査において、古墳築造技術の応用事例(天神山水城・前畠土塁)も確認されはじめた。具体的には、「土塊・盛土内層状被覆土+盛土傾斜積み+外皮盛土」の組み合わせであり、同土木技術は九州北部の古墳築造技術と直接系譜を有しており、同地での労役徵発を示す物証である。



図13 福岡県上毛町・皿山古墳群 1-1号墳横断面図 (S=1/120)

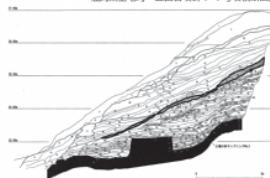


図14 福岡県春日市・天神山水城跡 1次調査土壁横断面図 (S=1/80)

花崗岩風化土等の流出を避けるために、端部要所に土壤列、土塁下部上面(一次填丘上面)に盛土内層状被覆土を配する。そして、土塁完成後(二次填丘完成後)に外皮盛土を面的に積む。

※流出率高い花崗岩風化土は土留必須⇒版築or土塊列・石列

図37

図 38



後に「大宰府外郭線」を構成する城塞群は、日本列島で唯一戦術単位での連携が可能な古代山城群であり、「辺賊の難」に備えた要地として「筑紫大宰」が常駐した。他の古代山城は戦略単位での連携は認められるが、城内を基点とした部隊展開距離を鑑みると、戦術単位での連携は難しい。

九州北部に分散する古代山城は、外敵による現地での兵站確保（評倉保管物の収奪等）を阻害するとともに、各国造軍の「遊兵」化（戦場離脱・逃散）を抑止し、「死兵」として用いるための軍事動員基点と考える。情報伝達能力の限界を補填するには、當時は分散する各国造軍の対処的動員力維持が重要である。

七 おわりに

いうふうに運用するかという視点で、遺跡を見ていかなければいけないのではと思っております。（図38）

（図38）

最後に戦術的視点でみると、大宰府外郭線といわれている大野城と基肄城とかいうのは、日本列島で唯一、実際に目視レベルで、戦術単位で連携が可能な古代山城なのです。他の古代山城は、辛うじて遠見で目視はできるけれども、さすがに城内から部隊を展開して、対処的に連携するにはあまりにも離れすぎているわけです。そういう他の古代山城は、戦略単位での連携というのは可能ですが、戦術単位では連携はとてもできないんだろう、と考えています。この視点で古代山城を見ていくと、情報伝達能力には限界がある時代に、平時は各地に分散している国造軍を対外戦争に引きずり込む施設、軍隊の動員起点として古代山城を考えた方がいいんじゃないかな、と僕は考えております。

ご清聴ありがとうございました。